

その二十

ある朝のこと、奈半利町の農業用水施設工事の現場に、大量のスイカが、しかも塩つきで置いてありました。北川村の国道バイパス工事の現場では、差し入れの缶ジュースが積まれています。モノを貰ったからどうこうというものでもないのですが、なんとも嬉しいことです。さて、「おまえ人を育てるのがヘタやなあ」と社長に酷評された私はどうなったのか。自分でいうのもなんですが、少々、変わりました。成長していないと、これまたある意味刻印を押された若い技術屋さんたちは、私の目から見れば、相変わらず「まだまだ」という段階です。しかし、個人差はあるものの、目に見えて、数字にも現れて、成長しています。私が変わることが出来たのは、いったい何故だったのでしょうか。

私に叱られ萎縮する、若い技術屋さんたち

を見ながら、私はふと思いました。

「こいつらも辛いのだ」と。

「俺の熱い思いは、単なる独りよがり過ぎないのではないかと。」

辛いのは自分だけではない、私たちの業界が厳しい状況に置かれているのだとすれば、

その住人の大半は「辛い」のだと。

仕事がない事を「政治」のせいにするの

も、仕事が進まないのを「役所」のせいにする

のも、成長しないのを「若い人」のせいにする

のも、全て思考の根本は同じです。それ

ならば、「他人のせい」にせず、「自分か

ら変わる」こと、そして「常に変わり続ける

こと」が必要なことなのだ、考えたので

す。

先人たちが営々と積み重ねてきた過去のお

かげで、今の私たちがあります。かといっ

て、その延長線上に未来があるわけではあり

ません。

今という時代の中小公共建設業が、信頼を

再構築するにはどうしたらいいのか。

過去の延長線上に未来を見ることなく、自分から変わること。そして動きながら考え抜く。そのことから、問題解決の可能性を見つきたいと、私は思うのです。